

Contents

1	序章	2
2	綿羊	4
3	花儿	7
4	第四章	9
5	第五章	11
6	第六章	13
7	第七章	14

Chapter1 序章

六歳さいの時とき僕は、たいけん「体験談」という原生林げんせいりんについて書かれた本ほんで、素晴らしい挿絵さしえを見たことがある。それは大蛇だいじゃのボアが猛獣もうじゅうを飲み込もうとしている絵えだった。本ほんにはこんな説明せつめいがあった。

ボアは獲物えものを噛まずに丸ごと飲み込みます。すると動けなくなるので、獲物えものを消化しょうかする半年はんとしもの間あいだ、ずっと眠ねむって過すぎします。

僕はジャングルでの冒険ぼうけんについていろいろと考かんがえ、自分でも色鉛筆じぶんいろえんぴつを使って、生まれて初めての絵えを描かき上げた。その傑作けっさくを大人たちに見せ、怖いこわかどうか聞きいてみた。すると、こんな答こたえが返かえってきた。

どうして帽子ぼうしが怖こわいんだい？

帽子ぼうしの絵えなんかじゃなかった。ゾウを消化しょうかしているボアを描えがいたのだ。でも、大人おとなにはわからないらしいので、今度はボアの内側こんどうちがわの絵えを描かいてみた。大人おとなには何時なんじだって説明せつめいが必要ひつようなのだ。僕の二番目ぼく にばんめの絵えでは、ちゃんとボアの中なかにいるゾウが見えていた。しかし大人おとなたちは中なかが見えようが見えまいが、ボアの絵えは片付かたづけて、地理ちりや歴史れきし、算数さんすうや文法ぶんぽうの勉強べんきょうをしなさいと、僕ぼくを嗜たしなめた。

こうして、6歳さいにして僕は偉大な画家ぼく いだい が かになるという夢ゆめを諦あきらめた。作品第一号さくひんたい とうと第二号だい とうが共に不評ふひょうで、気持ちきもちが挫くじけてしまったのだ。

大人おとなというのは、自分たちとは全まったく何もわかっていないから、いつも子供こどもの方が説明せつめいしてあげなきゃいけないくて、うんざりする。僕は別の仕事ぼく べつ しごとを選ぶ必要えら ひつように迫せまられて、飛行機ひこうきの操縦士そうじゅうしになった。そして、世界せかい中じゅうをあちこち飛び回と まわった。地理ちりは確たしかに役やくに立たった。僕は一目ぼく ひとめで中ちゅう国ごくとアリゾナみ わを見分ことける事ができる。夜間飛行やかんひこうで迷まよった時ときなど、そういう知識ちしきがあると本ほん当とうに助たすかる。

これまでの人生じんせいで、僕はたくさんぼくの重じゅうよう要人物じんぶつと知しり合あった。随分多くずいぶんおほの大人おとなたちと一緒いっしょに暮くらしたし、マジカにも見みてきた。それでも僕ぼくの考かんがえはあまり変かわらなかった。僕は物分ものわかりのよさそうな人ひとに出会であった時ときには必かならず、肌はだに離はなさず持もち歩あるいていた作品第一号さくひんたい とうを見せ、実験じっけんしていた。その人ひとが本ほん当とうに物事ものごとの分わかる人ひとかどうか、

し
知りたかったから。でも、^{こた}答えはいつも^{おな}同じだった。

^{ぼうし}
帽子だね。

^{あとぼく}その後僕は^{はなし}ボアの^{はなし}話も、^{げんせいりん}原生林の^{はなし}話も、^{ほし}星の^{はなし}話もしなかった。^{はなし}話を^あ合わせて、
^{せいじ}ブリッジやゴルフや、^{はなし}政治やネクタイの^{はなし}話をした。するとその^{おとな}大人は^{はなし}話が^わ分かる^{あいて}相手
と^し知り^あ合えたと言って^い喜^{よろこ}ぶのだ。

Chapter2 綿羊

こうして僕は、六年前、サハラ砂漠で飛行機が故障するまで、心を許して話せる相手に出会う事もなく、一人で生きてきた。飛行機はエンジンのどこかが壊れていた。整備士も、乗客も乗せていなかったの、僕は難しい修理の仕事を一人でやり遂げるしかなかった。

死活問題だった。飲み水は一週間分あるかないかだった。

最初の夜、僕は、人の住む場所から千マイルも離れた砂の上で眠った。大海原を筏で漂流する遭難者より、ずっと孤独だった。だから、夜明けに小さな可愛らしい声で起こされた時、僕がどんなに驚いたか想像してみしてほしい。その声は、こう言った。

お願い、羊の絵を描いて。

えっ？

羊を描いて。

雷に打たれたみたいに飛び起きると、目を擦って辺りを見回した。そこには、とても不思議な子供が一人いて、僕を真剣に見つめていた。僕は突然現れたその子供を、目を丸くして見つめた。何度も言うけれど、人の住む所から千マイルも離れていたのだ。しかしその子は道に迷っているようには見えなかった。疲れや餓えや渇きで死にそうになっているようにも、怖がっているようにも見えなかった。人の住む所から千マイルも離れた砂漠の真ん中にいながら、途方に暮れた迷子といった様子は少しもなかったのだ。

ようやく口が聞けるようになると、僕はその子に尋ねた。

君はこんな所で何をしているの？

しかしその子はとても大切な事のように、静かに繰り返すだけ。

お願い、羊の絵を描いて。

バカげた話だが、人の住む所から千マイルも離れて、死の危険にさらされているというのに、僕はその子に言われるままに、ポケットから一枚の紙切れと万年筆を取

だ
り出してた。

だけどそこで、僕が一生懸命勉強してきたのは、地理と歴史と算数と文法だけだった事を思い出して、少し不機嫌になりながら、絵は描けないんだと、その子に言った。

そんなの構わないよ。羊を描いて。

僕は羊の絵なんか描いたことはなかったので、自分に描けるたった二つの絵の内
の一つを描いてあげた。ボアの外側の絵だ。その時男の子がこういうのを聞いて、僕はびっくりした。

違う、違う、ボアに飲み込まれたゾウなんていないよ。ボアはとっても危険だし、ゾウは結構場所塞ぎだから。僕の所はとっても小さいんだ。欲しいのは羊、羊を描いて。

そこで僕は羊を描いた。

ううん、駄目だよ。この羊はひどい病気だ。違うのを描いて。

僕は描き直した。男の子は僕を気遣って優しく微笑んだ。

よく見て。これは羊じゃないでしょう。雄羊だよ。角があるもの。

そこで僕はまた描き直した。けれどそれも前の二つと同じように拒絶された。

この羊は年を取りすぎてるよ。僕、長生きする羊が欲しいの。

我慢も限界に近付いていた。修理を始めなければと焦っていた。僕はざっと描き殴った絵を男の子に投げ渡した。

これは羊の箱だ。君が欲しがっている羊はこの中にいるよ。

すると驚いたことに、この小さな審査員の顔がぱっと輝いたのだ。

ぴったりだよ。僕が欲しかったのは、この羊さ。ね、この羊草をいっぱい食べるかな。

どうして？

僕の所はとっても小さいから。

大丈夫だよ。君にあげたのは、とっても小さな羊だからね。

そんなに小さくないよ。あれ、羊は寝ちゃったみたい。

こうして^{ぼく}僕は^{ちい}この^{おうじ}小さな^し王子^あさまと知り合いになった。

Chapter3 花兒

王子さまがどこから来たのか分かるまで、かなり時間がかかった。王子さまは僕にはたくさん質問をしてくるのに、こちらからの質問にはほとんど耳を貸さなかったのだ。

少しずつ全てが明らかになっていったのは、王子さまが偶々口にした言葉からだった。それは初めて僕の飛行機を見た時の事だ。

なに？ これ。

飛行機。空を飛ぶんだ。僕の飛行機さ。

空を飛べると自慢げに話していたら、王子さまは大声で言った。

えっ？ じゃ、君は空からおっこちてきたんだ。

まあ、そうだな。

ああ、それはおかしいね。

王子さまは可愛い声で笑い出したが、僕はかなりいらいらした。自分を襲った災難を真面目に受け取って欲しかったのだ。しかし王子さまは続けてこう言った。

それじゃあ、君も空から来たんだね。どの星から来たの？

その瞬間、王子さまがなぜここにいるのかという疑問にさっと光が差し込んだように感じて、僕はすぐに尋ねた。

君はよその星から来たのかい？

しかし王子さまは答えず。飛行機を見て、そっと首を振っただけだった。

これに乗って来たのなら、そんなに遠くからじゃないよね。

そう言うと、物思いに沈んでいった。王子さまはポケットから羊の絵を取り出して、大切そうに眺めていた。

君はどこから来たの？ その羊をどこへ連れて行くつもりなの？

この箱がいいのはね、夜になると、羊の小屋になるってところだよ。

そうだね、いい子にしていたら、昼間は羊を繋いでおく綱もあげるよ。それに、綱を結んでおく杭もね。

羊を繋いでおくの？ おかしいよ、そんなの。

でも、繋^{つな}いでおかなかったら、勝手^{かって}にあっちこっち歩^{ある}き回^{まわ}って、どこかいなくなっ
ちゃうだろ。

すると、僕^{ぼく}の友^{とも}達^{だち}はまた笑^{わら}い出^だした。

羊^{ひつじ}がどこへ行^いくっていうのさ。

どこにでも。ずっとまっすぐ歩^{ある}いていて。。。。

大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶだよ。僕^{ぼく}の所^{ところ}は本^{ほん}当^{とう}に小^{ちい}さいからね。まっすぐに行^いっても、そんなに遠^{とお}
くには行^いけないよ。

Chapter4 第四章

こうして僕は二つ目のとても大切な事を知った。王子さまのいた星は、家一軒よりやや大きいくらいの大きさなのだ。それほど驚きはしなかった。地球や木星、火星、金星の様に、名前のある巨大な星以外にも、望遠鏡でも見つからないほど小さな星が、何百とあることを知っていたからだ。天文学者がそんな星を発見すると、名前の代わりに番号をつける。

例えば、小惑星325といった様に。王子さまがやってきた星は、小惑星B612だと思う。1909年に、トルコの天文学者が一度だけ望遠鏡で観測した星だ。天文学者は国際天文学会で、自分の発見について堂々と発表した。しかしその時は服装のせいで、誰にも信じてもらえなかった。大人なんてそんなもんだ。しかし、小惑星B612に名誉挽回の幸運が訪れた。トルコの独裁者が国民にヨーロッパ風の服を着るように命令し、従わなければ死刑という事になったのだ。そこで天文学者は、1920年、今度はもっと専念された服装で同じ発表を繰り返した。この時は皆が彼の言う事を信じた。

この星の事をこんなに詳しく話して、番号まで教えるのは、大人たちのせいだ。大人は数字が好きだ。数字以外には興味がない。新しい友達の事を話しても、どんな声か、どんな遊びが好きか、ちょうちょう集めているか、といった大切な事は何も聞いてこない。何歳か、何人兄弟か、お父さんの年収はいくらか、といった数字のことばかり聞いてきて、それですっかり知ったつもりになる。

王子さまは本当にいたよ。可愛かったし、笑っていたし、羊を欲しがっていた。だって、羊を欲しがらって事は、間違えなくその人が本当にいるって事の証拠だからね。

こんなふうに話しても、大人は肩を竦め、子供扱いするだけだ。しかし、王子さまが来た星は小惑星B612だよ、たとえば、大人は納得して、それ以上余計な事は聞いてこない。

大人なんてそんなもんだ。でも、悪く思っているはいけないよ。子供は大人に対して、広い心で接してあげなきゃね。でも、生きるという事がどういう事なのか、よくわ

かっている僕^{ぼく}たちには、数字^{すうじ}なんかどうでもいい。

本当^{ほんとう}だったら僕は、この物語^{ものがたり}をお伽話^{とぎばなし}のように始めた^{はじ}かった。昔々^{むかしむかし}、自分^{じぶん}よりほんの少し^{すこ}大きいだけの星^{おほ}に暮らしている小さな王子^{ちい おうじ}さまがいました。王子^{おうじ}さまは友達^{ともだち}をほしがっていました。生きる^いという事^{こと}がどうい^{こと}う事^{こと}なのかわかって^{ひと}いる人^{ひと}には、こういう言^いい方^{かた}のほう^{ほう}がずっと本^{ほん}当^{とう}らしく聞^きこえるだろう。僕^{ぼく}はこの本^{ほん}を軽^{かる}々^{がる}しく読^よまれたくない。こうい^{おも}った思^{でばなし}い出^{かた}話^{こと}を語^{ぼく}る事^{こと}は、僕^{ぼく}にとっ^{ほんとう}て本^{から}当^{ぼく}に辛^{ともだち}い。僕^{ぼく}の友^{ひつじ}達^つが羊^{ねん}を連^{かれ}れてい^{こと}ってしま^かって、もう6年^{ねん}にな^{かれ}る。こうして彼^{かれ}の事^{こと}を書^かくのは、彼^{かれ}を忘^{わす}れ^れないため^{ともだち}だ。友^{わす}達^{かな}を忘^{だれ}れてしま^{ともだち}うのは悲^{かな}しい、誰^{だれ}にでも友^{ともだち}達^{だれ}が^{ともだち}いるわけ^{だれ}ではない。それに、僕^{ぼく}も数字^{すうじ}にしか興^{きょうみ}味^{おとな}のない大^{おとな}人^{おとな}になっ^{おとな}てしま^{おとな}うかもし^{おとな}れない。そうなら^{おとな}ないた^{おとな}めに僕^{ぼく}は、絵^えの具^ぐ箱^{はこ}と鉛^{えんぴつ}筆^かを買^{さい}った。6歳^{さい}でボア^{そとがわ}の外^{うちがわ}側^{えが}と内^{いらい}側^{なに}を描^{えが}いて以^{えが}来^{えが}、何^{えが}も描^{えが}いてい^{えが}なかつ^{えが}た僕^{ぼく}にとっ^{えが}て、この年^{とし}でもう一^{いちど}度^え絵^かを描^{たいへん}くのは大^{こと}変^{こと}な事^{こと}だ^{こと}った。でき^{こと}るだ^{こと}け、本^{ほんもの}物^{ほんもの}そっく^{しょうぞうが}りな肖^{えが}像^{えが}画^{えが}を描^{えが}いてみ^{えが}るつ^{えが}もりだ。

でも、ちゃん^{えが}と描^{えが}けるかどう^{えが}かは、自^{じしん}信^{じしん}が^いない。一^{いちまい}枚^{まい}い^{えが}いもの^{えが}が描^{えが}けても、その次^{つぎ}はま^{つぎ}るで似^にてい^にないかもし^にれない。背^せ丈^{たけ}が難^{むずか}しいし、服^{ふく}の^{いろ}色^{いろ}も迷^{まよ}ってしま^{まよ}う。手^て探^{さぐ}り^{てさぐ}でや^{てさぐ}って^{てさぐ}みるが、も^{だいじ}っと大^{こま}事^{こま}な細^{ぶぶん}か^{まちが}い部^{まちが}分^{まちが}を間^{まちが}違^{まちが}えてしま^{まちが}うかもし^{まちが}れない。でも、そ^{まちが}こは^{まちが}大^{おおも}目^みに見^{おおも}てほ^{おおも}しい。王^{おうじ}子^{くわ}さ^{こと}まは^{なに}詳^{せつめい}しい事^{こと}は何^{なに}も説^{せつめい}明^{めい}して^{せつめい}くれ^{せつめい}なかつ^{せつめい}たの^{せつめい}だ。おそ^{せつめい}ら^{せつめい}く彼^{かれ}は僕^{ぼく}の事^{こと}を自^{じぶん}分^{おな}と^{なかま}同^{おも}じ仲^{おな}間^{なかま}だと思^{おも}ったの^{おも}だ^{おも}らう。し^{ざんねん}かし残^{ざんねん}念^{ざんねん}な^{ざんねん}が^{ぼく}ら僕^{ぼく}は、箱^{はこ}の^{はこ}中^{なか}の^{ひつじ}羊^みを見^{こと}る事^{こと}が^{すこ}でき^{おとな}ない。少^{すこ}し^{おとな}ば^{おとな}かり大^{おとな}人^{おとな}にな^{おとな}ってしま^{おとな}ったのかもし^{おとな}れない。年^{とし}を^{とし}取^とった^とのだ。

Chapter5 第五章

ひ お ぼうご ぼく おうじ ほし こと たびだ たび
日を追うごとに僕は王子さまの星の事や、そこからの旅立ち、これまでの旅について知るようになっていった。おうじ たまたまうち ことば すこ ようす
王子さまが偶々口にした言葉で、少しずつ様子がわかってきた。こうして三日目に、バオバブをめぐる大騒動を知った。これも ひつじ
羊のおかげだった。おうじ きゅう しんぱい
王子さまが急に心配になったらしくて、こう聞いてきたのだ。

ひつじ ちい き た ほんとう
羊が小さな木も食べるって、本当なんでしょう？

うん、ほんとうだよ。

ああ、よかった。

ひつじ ちい き た こと だいじ こと ぼく
羊が小さな木を食べる事がなぜそんなに大事な事なのか、僕にはわからなかった。しかし、おうじ さら き
王子さまは更にこう聞いてきた。

だったら、バオバブも食べるよね。

ぼく おうじ ちい き きょうかい たてもの おな おお
僕は王子さまにバオバブは小さな木じゃなくて、教会の建物と同じくらい大きな木だから、ゾウの群れを丸ごと連れてきても、たった一本のバオバブも食べきれないだろうと教えてあげた。ゾウの群れを思い描いて、おうじ わら
王子さまは笑った。

うえ うえ つ かさ
上に上に積み重ねなきゃいけないね。

しかし、つづ するど してき
続けてなかなか鋭い指摘をした。

バオバブだって、おお きなる まえ ちい
大きくなる前は、小さいんだよね。

そりゃそうだよ。それにしても、どうして ひつじ ちい
羊に小さなバオバブを食べてもらいたいんだい？

なに い
何を言ってるの？ そんなのあたり前でしょ。

ぼく ひとり なんもん と あ こと さんざんあたま ひね
僕は一人でこの難問を解き明かす事になり、散々頭を捻った。つまり、こういう事だ。おうじ ほし ほか ほし おな くさ わる くさ
王子さまの星には、他の星と同じように、よい草と悪い草があった。よい草はよい種から育ち、悪い草は悪い種から育つ。しかし、種は目に見えない。土の中で ひつじ
ひっそりと眠っている。その一つが気まぐれに目を覚ますと、伸びをして、おずおずとあどけない小さな茎を太陽に向かって伸ばし始める。それが あかかぶ
赤蕪やバラだったら、そのままにしておいて構わない。でも、わる くさ わ ぬ と
悪い草だと分かったら、すぐに抜き取らなくて

はいけない。王子さまの星には、そんな恐ろしい種があった。バオバブの種だ。星の土はどこもかしこもバオバブの種だらけだった。少しでも抜くのが遅れると、バオバブはもう手がつけられなくなる。星全体を覆いつくし、根っ子がつき抜け、穴を開けてしまう。小さな星だと殖過ぎたバオバブで破裂してしまう。

決まりにできるかどうかだね。毎朝、自分の身支度が済んだら、星の手入れに取り掛かる。

芽を出したばかりのバラとバオバブはよく似ているんだけど、それを見分けて、バオバブだと分かったら、すぐに抜いてしまう。手間はかかるけど、とっても簡単な事だよ。偶には仕事を後回しにしても大丈夫な時ってあるけど、バオバブでそんな事をしたら、取り返しがつかなくなるんだ。例えばね、ある星に怠け者が住んでいたんだけど、その人は三本さんぽんバオバブをほったらかしにしていたばかりに……僕は王子さまの話す通りにその星の絵を描いた。星より巨大な三本のバオバブと途方に暮れる怠け者、お説教臭い事を言うのはあまり好きじゃないけれど、バオバブの脅威は地球ではほとんど知られていないし、小惑星で道に迷った人が危険な目に遭う可能性は、あまりにも大きい。だから僕は一度だけ普段の慎みを忘れて、こう言っておこう。

おい、子供たち、バオバブに気をつけろ。

僕は友人たちに警告を与えるために、一生懸命この絵を仕上げた。苦労して描いた価値はあった。他はこれほどうまくいかなかった。バオバブを描いた時は、切羽詰って気持ちが高ぶっていたのだ。

Chapter6 第六章

ああ、^{ちい}小さな^{おうじ}王子さま。こうして^{ぼく}僕は^{すこ}少しづつ、^{ゆううつ}ささやかで^{きみ}憂鬱な^{じんせい}君の^{りかい}人生を理解
していった。^{なが}長い^{あいだ}間、^{きみ}君には^{うつく}美しい^{ゆうひ}夕日しか^{こころ}心を^{なぐさ}慰める^{もの}物がなかった^{こと}事も。^{ぼく}僕
がこの^{ひみつ}秘密を知ったのは、^し四日目の^{あさ}朝。^{きみ}君がこう言った^い時だ。^{とき}

^{ぼく}僕、^{ゆうひ}夕日が大好きなんだ。^{ゆうひ}夕日を見に行こうよ。

でも、^ま待たなきゃね。

^ま待って、^{なに}何を？

^ひ日が^{しず}沈むのをさ。

^{きみ}君はとてもびっくりしたようだった。そして、すぐに^{わら}笑い出した。^だ

^{ぼく}僕、まだ^{じぶん}自分の^{ほし}星にいるつもりにたっていたよ。

そうだね。

^{だれ}誰もが^し知っているように、^{しょうご}アメリカが^{とき}正午の時には^{ゆうぐ}フランスは夕暮れた。だから、
^{いっぶん}一分で^とフランスに^{おこな}飛んで^{ゆうひ}行けたら、^み夕日を見る^{こと}事ができるけど、^{ざんねん}残念ながら、^{フランス}フラン
スは^{とお}遠すぎる。だけど^{きみ}君の^{ちい}小さな^{ほし}星では、^{すこ}ほんの^{いそう}少し^{うご}位相を動かすだけでいい、そう
すれば^み見たい^{とき}時に^{なんじ}何時でも、^{たそがれ}黄昏を^{なが}眺めていられる。

^{ぼく}僕ね、^{いち}一日に^{かい}44回も^{ゆうひ}夕日を見^みた^{こと}事があるよ。

そう言って、^い暫くして^{しばら}から^{つけくわ}こう付加えた。

ね、^{かな}悲しくて^{とき}たまらない^{ゆうひ}時って、^{こい}夕日が恋しくなるよね。

^{かい}44回も^{ゆうひ}夕日を見^みた^ひ日は、^{かな}悲しくて^{たまら}なかつたのかい？

しかし、^{おうじ}王子さまは^{こた}答えなかった。

Chapter7 第七章

五日目、^{にちめ} 羊^{ひつじ}のおかげで、王子さま^{おうじ}の人生^{じんせい}のもう一つ^{ひと}の秘密^{ひみつ}が明かされた。いきなり何^{なに}の前^{まえ}触れもなく、王子さま^{おうじ}は僕^{ぼく}に聞いてきた。ずっと黙^{だま}って考^{かんが}えていた問題^{もんだい}が、^{こた} とうなく^{みだ} 答えを見出したように。

羊^{ひつじ} っ、^{ちい} 小さな木^きを食^たべるなら、花^{はな}も食^たべるんじゃないかな。

羊^{ひつじ} は見^みつけた物^{もの}は何^{なん}でも食^たべるよ。

刺^{とげ}のある花^{はな}でも？

そう、刺^{とげ}のある花^{はな}でもね。

だったら、刺^{そし}って何^{なに}のためにあるの？

そんな事^{こと}は知^しらない。

その時^{とき}僕^{ぼく}はエンジンにかたく食^くい込んだボルト^こを外^{はず}すのに必死^{ひっし}になっていた。故障^{こしょう}は極^{きわ}めて深刻^{しんこく}だった。飲^のみ水^{みず}も底^{そこ}をつきかけていたし、災厄^{さいやく}の事態^{じたい}に怯^{おび}えていた。

ね、刺^{とげ}は何^{なに}のためにあるの？

王子さま^{おうじ}は一度^{いちど}質問^{しつもん}をしたら、その答^{こた}えを聞^きくまで絶^{ぜっ}対^{たい}にあきらめない。僕^{ぼく}はボルトにいらいらしていたので、考^{かんが}えもせず適^{てきとう}当^{こた}に答^{こた}えた。

刺^{とげ}は何^{なに}の役^{やく}にも立^たたないよ。ただの花^{はな}の意^い地^じ悪^{わる}さ。

えっ？

しかし、一^{いっしゅん} 瞬^{ちんもく}の沈^{あと}黙^{おうじ}の後^{ふんぜん}、王子さま^{おうじ}は憤^い然^{かえ}として言^いい返^{かえ}してきた。

そんなこと、信^{しん}じない。花^{はな}は弱^{よわ}くて無^む防^{ぼう}備^びなんだ。でも、できるだけの事^{こと}をして、安^{あん}心^{しん}したいんだ。刺^{とげ}があれば、怖^{こわ}い存在^{そんざい}になれると思^{おも}っているんだ。

僕^{ぼく}は返^{へん}事^じもしなかった。こんな事^{こと}を考^{かんが}えていたのだ。

このボルトが動^{うご}かないなら、金^{かな}槌^{づち}で叩^{たた}き壊^{こわ}すしかないな。

しかし、王子さま^{おうじ}が再^{ふた} び割^わり込^こんできた。

でも、君^{きみ}、君^{きみ}は思^{おも}ってるの？ 花^{はな}が。。

ちが、ちが、何^{なに}とも思^{おも}っていないよ。思^{おも}い付^ついた事^{こと}を適^{てきとう}当^いに言^いっただけさ。僕^{ぼく}は今^{いま}重^{じゅう} 要^{よう}な事^{こと}で頭^{あたま}がいっぱいなんだよ。

じゅうよう こと
重 要 な 事 ？

おうじ ぼく み かなづち も ゆびさき きかいあぶら ま くろ おうじ
王子さまは僕を見ていた。金槌を持って、指先は機械油で真っ黒。王子さまにとっ
ては、ひどく不格好に見えるものの上に屈み込んでいる。

きみ はな かた おとな なに ま
君の話し方は大人みたいだ。何もかもごちゃ混ぜにしている。

い ぼく は おうじ ほんとう いか きんいろ
そう言われて、僕はちょっと恥ずかしくなった。王子さまは本当に怒っていた。金色
の髪が風に揺れていた。

ぼく あか が お く ほし い こと
僕は赤ら顔のおじさんが暮らす星に行った事がある。そのおじさんは一度も花の
かお こと ほし なが こと だれ あい こと
香りをかいた事がない。星を眺めた事もない。誰かを愛した事もない。おじさんは
たしざんいがい なに こと いちにちじゅう きみ く かえ い
足算以外、何もした事がないんだ。そして一日中、君みたいに繰り返して言ったよ。
わたし じゅうようじんぶつ わたし じゅうようじんぶつ おおいば い ば ふく あ
私は重要人物だ、私は重要人物だってね。そして大威張りに威張って、膨れ上
がっている。でも、そんなのは人間じゃない、キノコだ。キノコだよ。

おうじ かお いか あお
王子さまの顔は怒りのあまり青ざめていた。

なに ねん まえ はな とげ つ なに ねん まえ ひつじ はな
何百万年も前から、花は刺を付けている。何百万年も前から、羊はそれでも花
た
を食べる。

はな やくた とげ つ かんが だいじ こと
どうして花がわざわざ役立たずの刺を付けるのか、考えるのは大事な事じゃないっ
ていうの？ 羊と花との戦いは重要じゃないっていうの？ あか が お ふと
んのだしざん だいじ じゅうよう ぼく せかいちゅう ひと
の足算よりも、大事でも、重要でもないっていうの？ 僕は世界中でたった一つだ
けの花を知っていて、それは僕の星にしか咲いていないのに、羊がある朝何もかんが
ずにパクっとその花を食べてしまっても、そんな事は重要じゃないっていうの？ も
し だれ なに ほし なか ひと ほし さ はな あい ひと
しも誰かが何百万もの星の中でたった一つの星に咲く花を愛していたら、その人は
ほしそら み あ しあわ ぼく はな さ おも
星空を見上げるだけで、幸せになれる。僕の花はあのどこかで咲いている、と思っ
ね。でも ひつじ はな た ひと ほし ひかり すべ
羊が花を食べてしまったら、それはその人にとって、星の光が全ていきな
り消えてしまうって事なんだよ。それが重要じゃないっていうの？

おうじ いじょうな い ふ い な だ よる
王子さまはそれ以上何も言えなくなった。そして不意に泣き出した。夜になってい
た。ぼく こうぐ な す かなづち のど かわ せま く し
僕は工具を投げ捨てた。金槌もボルトも、喉の渇きも、迫り来る死も、もはやど
うでもよかった。ぼく ほし ちきゅう なぐさ もと ちい おうじ
僕の星、この地球に慰めを求めている小さな王子さまがいたのだ。
ぼく おうじ りょううで いだ ちい からだ しず ゆ
僕は王子さまを両腕で抱きしめ、小さな体を静かに揺すってあげた。

君^{きみ}が愛^{あい}する花^{はな}は危^{あぶ}ない目^めになんか遭^あわないよ。僕^{ぼく}が羊^{ひつじ}の口^{くち}に嵌^はめる口輪^{くちわ}をかい
てあげる。